

交通外傷による遷延性意識障害に対する鍼治療の試み

Attempt of acupuncture treatment to persistent disturbance of consciousness due to traffic injury

鈴木 雅雄<sup>1)</sup>、松本 淳<sup>2)</sup>、八十川 雄図<sup>1)</sup>、中村 美津<sup>2)</sup>、奥村 歩<sup>1)</sup>、篠田 淳<sup>1)</sup>  
中部療護センター・木沢記念病院 脳神経外科<sup>1)</sup>、中部療護センター 看護部<sup>2)</sup>、京都大学  
大学院医学研究科健康増進行動学分野<sup>3)</sup>、岐阜大学大学院医学研究科東洋医学講座<sup>4)</sup>

Masao Suzuki<sup>1)</sup>, Jun Matumoto<sup>2)</sup>, Yuuto Yasokawa<sup>1)</sup>, Mitsu Nakamura<sup>2)</sup>, Ayumi Okumura<sup>1)</sup>,  
Jun Shinoda<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>Chubu Medical Center for Prolonged Traumatic Brain Dysfunction, Kizawa Memorial Hospital,

<sup>2)</sup>Chubu Medical Center for Nursing, <sup>3)</sup>Department of Health Promotion and Human Behavior,  
Kyoto University School, <sup>4)</sup>Department of Oriental medicine, Gifu University School

【はじめに】交通外傷による遷延性意識障害は予後重篤な障害を残す。本障害に対しては、様々な治療法が試みられている。当センターでは新たな試みとして、鍼治療を用いて本障害に対して治療を開始した。今回は当センターでの鍼治療の活動と成果について報告する。

【方法】鍼治療開始にあたり、研究計画書の作成を行い、医の倫理委員会の承認後、センター内でスタッフ説明会を開催し各スタッフへ協力要請を行った。その後、鍼治療を希望している家族へインフォームドコンセントを行い、鍼治療を開始した。

【対象】対象は同意の得られた5例で年齢 $27.4 \pm 16.2$ 歳であった。鍼治療開始前に評価した、状態・反応スケールは $5.4 \pm 1.1 \cdot 7.2 \pm 1.9$ であり、中部療護センタースケールでは $70.5 \pm 5.6$ と共に障害の程度は高度であった。鍼治療方法：意識障害に効果があるとされる経穴（ツボ）を選択し、水溝、内関、太谿などを使用した。鍼治療は週1日、1日2回の頻度で行った。

【結果】H18年2月より鍼治療を開始し5月までの3ヶ月間で臨床的な効果が認められたのは5例中2例であった。効果を認めた2例では、追視や呼びかけに対しての反応性などが改善した。当センターのスケールでは、症例1：78から66まで改善し、症例2：68から60まで改善した。また、全例に共通して鍼治療後に全身の筋緊張の緩和が認められた。

【考察】鍼刺激は痛・触・圧覚などの知覚を与えることが出来る方法の一つであり、脳幹網様体への影響があると考えられている。今回、本障害患者5例に鍼治療を行い2例で臨床的な改善が認められた。今後は症例集積を行い詳細な検討を行っていく予定である。